

# 山

# 苗

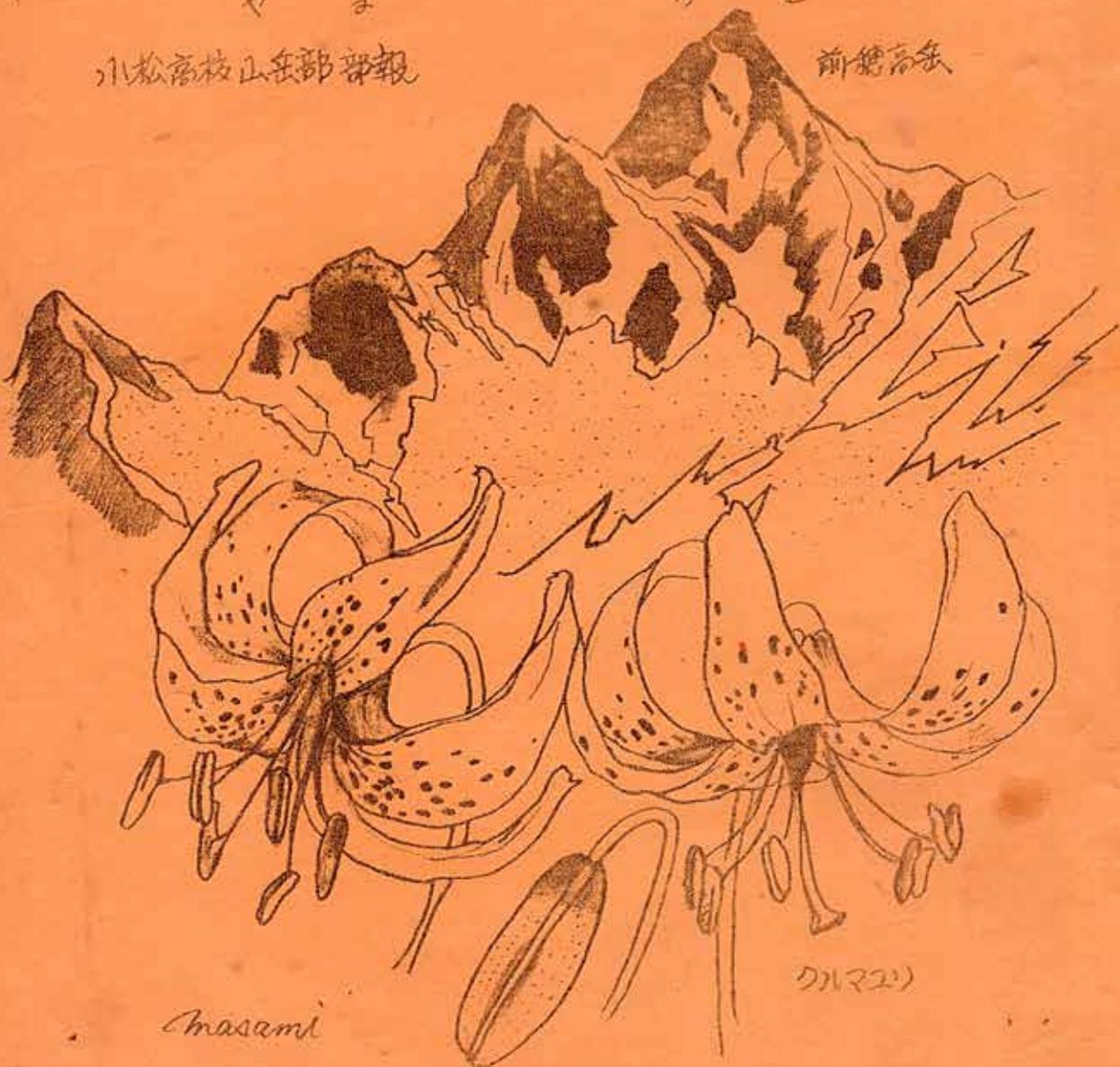
復刊1号

やま

ぶえ

小松高枝山楽部部報

前穂高系



Masami

クハマツ

↓はじめに↑

我が小松高教は、佐にいう高教であるらしい。つまり、大聖へ行く者が、  
大多数であるということである。大聖へ入るためには勉強しなければならな  
い。ということ。山に透かれたお々にとつては、山と勉強の両立が非常に  
重要な問題となる。うまく両立させた者、一方だけの者、結局どちらもダメ  
だった者、色々いる。とにかく、この文集は、そういつた訓練をのりこえつつ  
ある（のりこえられないかもし若者たちの記録である。勉強な文章、幼稚な  
ものへたとえばこの文章）ワンパターンなものなど、紛々あるがとにかく最  
後まで目を逸していただきたい。何かがあるかもしれない。

繪多

部報を出すのが何年ぶりになるのか、よく調べてみないとわからないが、  
昭和二十三年代にはよく出されていたらしい。この部報の「山哲」というの  
は昭和三十一年の部報の名を、そのまま使っているものがある。

「山哲」とは、岩波言語学には、<sup>①</sup>のわらで何人だもの、<sup>②</sup>贈物、  
土地の産物などをみやげとする場合が多い。③当然準備用意すべきもの、  
に役立つもの<sup>④</sup>とある。結局、「山哲」とは「山のみやげ」<sup>⑤</sup>とも詠さばよい  
のだからか、また他にも<sup>⑥</sup>解法があるかもしれない。

by 編集者

もくじ下

- 1、はじめに (木村) P.1
- 2、多年の剣沢合宿始末 (三井先生) P.3
- 3、大日山前人談 (土井) P.9
- 4、湯沢寺山前人談 (土井) P.10
- 5、白山、曇の大会一瞥 (中村) P.12
- 6、同 一男子 (永原) P.14
- 7、白山、強化訓練 (永原) P.16
- 8、北アルプス縦走一女子 (吉田中村、小林東野) P.17
- 9、同 一男子 (日乳・木村) P.22
- 10、インターハイ (東野) P.31
- 11、剣岳、新人大会一男子 (松村) P.34
- 12、同 一女子 (小林) P.35
- 13、雨飾山 (新本) P.36
- 14、大日合宿づめ (新本) P.31
- 15、空影岳 (木村) P.43

- 16、小松高校山岳部年表 (おまけ) P.46
- 17、山岳部に入って (吉) P.47
- 18、編集後記 (木村) P.48
- おまけ
- 19、昭和四年度小松高校山岳部山行表 P.49
- 20、同 購入備品 P.50
- 21、同 部員名簿 P.51
- 22、松志から見たる山々 P.53

ある山の創設合宿未

三井 叔閑

本校山岳部創設して最初の創設合宿

昭和二十七年夏

本校山岳部創設して最初の創設合宿をやるこい

のことに決つた。昭和二十七年夏のことである。

準備も難儀もパーテイシップのトリーニングも未

熟下りばかりでしうこのおれ等に期待が大きく、部

員一回のつマイトは更に旺盛、所々下りも本校OB

による金大山岳部の発足という集群があつて、OB

の同合宿にダブつて高校を指導してくれる

東つ下り、下り、下り、下り、下り、下り、下り、下り

(三井)計十五名で、七月二十二日光巻隊、二十

三日本隊が出発、当時は交通の便が栗原野まで一

日付、福橋をすぎ、称名池、林多坂のあえさは何

ともいふれまふ物だつた。是天下の奇斗大時開け

談下りさすまじい、アノ玉ころいの汗のしずくを水

夕下り、夕下り、夕下り、夕下り、夕下り、夕下り、夕下り

を見下ろすと、大雪原の横、山側に各大学のテ

ントが満ち、更に目を上げれば、雪原を日切つて創

岳本峰が、豪然とけたが、マリのさう、百人窟

を踏みつづさんばかり、ズコベの雪に云来する

雲が厚く、氷生ずる塚治郎、八つ峰の杜観も、

身ぶるいする巨観だ、皆、意気益々盛ん、テニト

で見ろ暮れゆくアーベントロートと彩どられた本

峰は深が出るほどすばらしい。

二十五日、早朝グリセード鐘巻を終え、身軽に

本峰へ、チニネ、ニードルをめぐり、更に千蔵谷

をグリセードで降る、快遊は頂上めぐりであつた

。金大パーテイと合流する。

二十六日、今日はトソ峯上半至岩バリエーション

マック予定だが、朝、ガス。て来て、隙間の晴

小間も雲の云来がけげしい。しかし、全見つマイト

満々で必要する。長太郎は合十一時、五峰の下、

四峰の上よりたどり、バリエーションマックとリハク

。岩の状況は最悪、チンゲルでも自分を見かね、  
小さ月形は目向ボッコをしいて乗しいが、い  
ごごかびびり下りして五峰頂上二時三十分、ここ  
でBでフリーターのI君が右足首を強く捻挫  
し下止め、サブの中田君に交代する。(マクミチ  
ト佐一)、五、六のころへ下りてからゲリセード  
を出発まで、片後天候がやや怪しくなり、山あ  
ろーが吹きつける。I君の負傷と、本峯の神相の  
変化、昨日とは激変の剣先の険勝さで現地の心理  
が恐怖へと傾斜しはじめ、夕刻、同志社大バ  
ン、一名岩より転落、後部裂傷の力、膝博二十  
、遂に夜中死亡、一同慟念とする。この日二年生  
NとIが身体不調と家事の下り帰る。夫は注意を  
与え帰路を確かめて帰す。

27日、昨日よりやや良いが朝やロリがス、それ  
でも全員元気一杯とむね手て存続を調整して五天  
のころに到着。雲の行方か気にケケリつづつ八重上  
半全路に入る。リッターユン、六峯Aノエース  
をやり、B、C、Dをまいてワ各通過の頃より、雲行  
かあやしくなるか、岩の途中改道行せざるをえな  
い。ワ峯のころでの本書のアノサイレンは時に異  
響する。祈うらまの歌、(巨峰)。ニードルかかスの  
切目にそそりえつすまは誠に小毒い。一休してい  
ると、急に響鳴が轟き始めた。急いで八本峯のコ  
ルへの下階にか、るが岩上でははかばかす、細心  
の注意か行動を過りせら。突如三井の印を下りて  
いる奴の荷負っているロリルか感電してジーンク  
とうなり出す。風向のため本人に知らせても仲々  
ぬからない。や、と気づいて真青になつたが、命  
よりロリルが大騒ぎのかしっ、かり離れない。  
雨が断続的にしくれ始めた。明日の手定めの前線

か早めにやって来たのか。八尋から直接長大御側へ下り去つのにルートを選ばず、サイルが必要だが凍しそこめて、ぬれた岩の上を雪後のぬまを免してしまふ。何ということか、順車に肩身までしてク名の下階に約30分も要したこともあった。ちがってアラレしほじりに吹きなぐられ、氷の真夏は急な寒気のため、手もかじかみ、頬も切られるほどになり、た。雪道の凍結は胸をつくように上り、更に急勾配に下つて下かガスである。しかし危険は迫つてくすくすしてはおれない。タリセードの崖をどれ程危険な採るかは考えられぬが、運断、命令一下、それそれ雪の上にとび出した。目指すは長大御側、全員の出発完了を見届けて、シンカリに各自の安全下階を気がかいつつ、三井も追いかける。雪は固くクラスト、突、途中く、朝、気にもとめなかつた。クレバアスカウや暗く割目の肩をのどかせて救命、不気味に口をあけている。も

しや落ちこんだ者が居ないかと気が気では無い。一本一本このぬすかしてはのどきこんでいる、ともかくいやらしい灰色の広々とした大雪原上、人、一人居ないことを確認の余裕と、のしかかる寂りような不気味さからのがれるように必死に下る。

かくて遅れ遅れて剣沢との出合に着いた時既にこのあたりの位置では天候は取巻(つ)して、出合のモレーンの上に全頭ノンビリと雑音(ま)ままにその通り)している様をみて、ホッとしたとたん気がめりてしまふ。ともかく気のものをた行動である。

天ト地へ帰着して居る時間、湿った焚木の煙で涙と鼻汗をこすりつつの炊事は並大抵でない。しかし晴れてよかった。また上部は吹き荒れているだろう。我々の後に残つて下階が凍れた金大パイターも帰着、途中一名が恐怖のため崖で倒れ

たのをリーターが背負つてきた。カンフルを注射する。

カンフルを注射する

夜に入つて再び嵐が下降し、遂に剣沢一帯は吹き荒れ、林立していた各テントは既にマハラになつた。テントも現在のごときものではない。土砂降りでは布地はジーパンみたいなもので、だから充分に水を呑み、風と嵐の支柱が折れ、○山おろしの導では経路した者むいといれからぬ状況だ。果して夜中に全部のテントがつぶれ、剣小屋に避難した。果して夜中に全部のテントがつぶれ、剣小屋に避難するが、たつた一つの小屋は既に満員だつた。たが、しかし外よりはマシだろう。止むなくフロ場の掃のフタの上に寝た奴が、フタが折れ、夜中に水中に毛のこんだのは、腹うつな空気を吹きとほしてくれる絶河の珍事だ、た。

二十八日

やはり猛烈な嵐、吹せんときめる。雲気も抑ゆる一瞬生はホムヨウクヒササ、たが昨日の金太郎は回復しホツとする。みじおの一日が暮れた。天候は回復の見立みせし、台風の接近の報に、悪魔の咆哮の夜中にリーター協議し明焼収をきめる。何とどう事か、まだ善治郎上下が残つてゐるといつのに、ぬい中、たを服を心替り巻かして乍ら口惜しむる。まだファイトハカ右といつた所サ、

二十九日

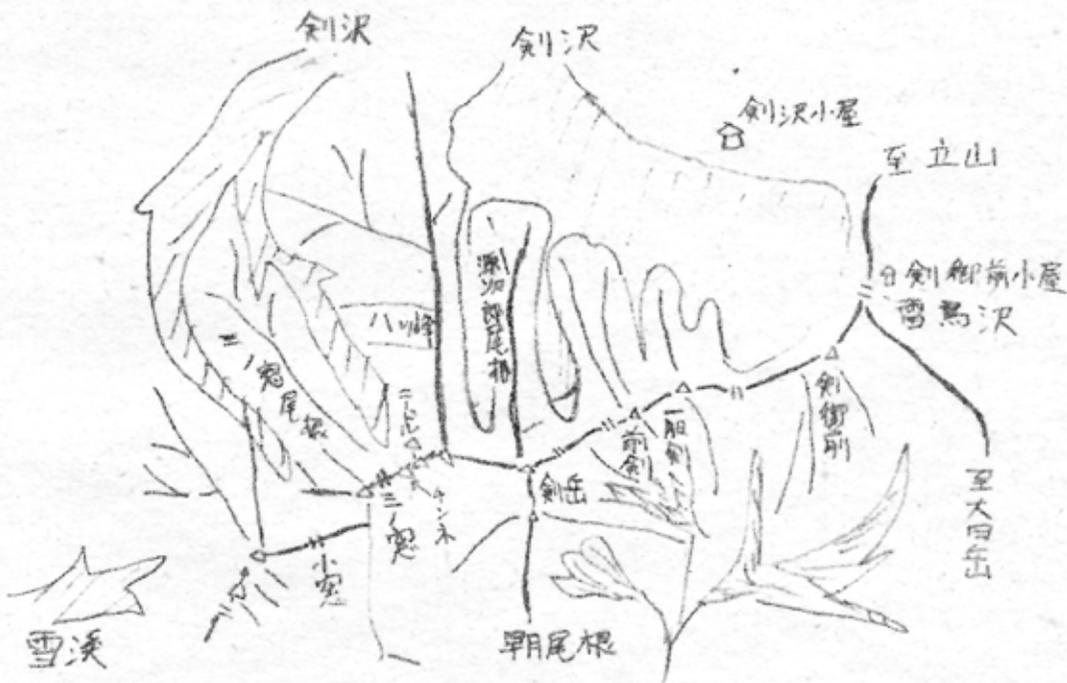
遂に悪雨の中を生発、と君が腹帯と講する。ひさの中、マヤ坊屋し帯巻を下さる。浪多に手間とり、善治郎は星とらひ、と君が懸懸化する。止むな三井及び二井部員一名を甘雨トし、三名はは小屋を吹せんし、金太郎悪魔の世話をうける。赤痢の危険は好む、たようだ。

他はリーター、君引卒を計六名、そのまきり姓名取



に、松高山岳部の特有の用字などが、たださっさといで  
 たりすばらしい其考だったことと想い出すので  
 よる。

三井先生は、松高山岳部の視展期ともいえる、  
 三井先生は昭和24年〜33年に、当部の顧問  
 昭和24年〜33年に、当部の顧問でいろいろい  
 ました。当時の倉宿の様子と、現在のところを比べ  
 と、かなり参考にするとお思います。  
 また、今回はこちらの手塚で、載せられま  
 せんでしたが、次号からはO Bの方の文も載せ  
 たいと思います。どうか原稿をお寄せ下さい。



朝の空気が寒さと緊張とではリッめ。いた。我々山岳部はこれが目の前の大日山を登ろうとしているのである。まったくのところが初志者である。僕は少し不安であった。緊張と不安とがいりまじった所持で僕の山行は、始まったのである。

最初からの登りは僕にとって肉体的においてではなくむしろ精神的に、苦しいものとなった。それだけにバテるのも早かった。

正直いってその時まで僕の頭の中には、登る存在というものは、是にものぼえたようなものなどという感があつた。たのである。これはとまでに登るかつかさびしいものだとわかっていた。強か、人を部へ入って来たころ、でもうささやめるわけにはいかない。僕は帰り道も知らないのだ。

後悔先に立たず、僕は金糸結ぶるしがたかった。

先輩は彼がその歌、楽しそうである。こっちは、もう足が鉛になった様な足のたというのだ。しまいたは先輩がたくさしくさ思えてきた。しかし右へつきまるとわけにもいかず、僕は足をひきずり登るのだった。でもそれは長くはなかつた。やがて足元が雪下なる。頂上は近い。そうなる。僕も現金なもので急ぐ元気がでてきた。はやく登ってしまいたい。それだけ思い僕は無我転手。上足を順者に前へ出すのだ。

頂上を見た時の僕の喜ぶたるもの、何ものとも及ぶまい。頂上についた時の風のすかすかしさは今も覚えてる。もつ部をやめようなどという考えはなかつた。実際、僕は気が変わりやすいのだ。

E.M.D.

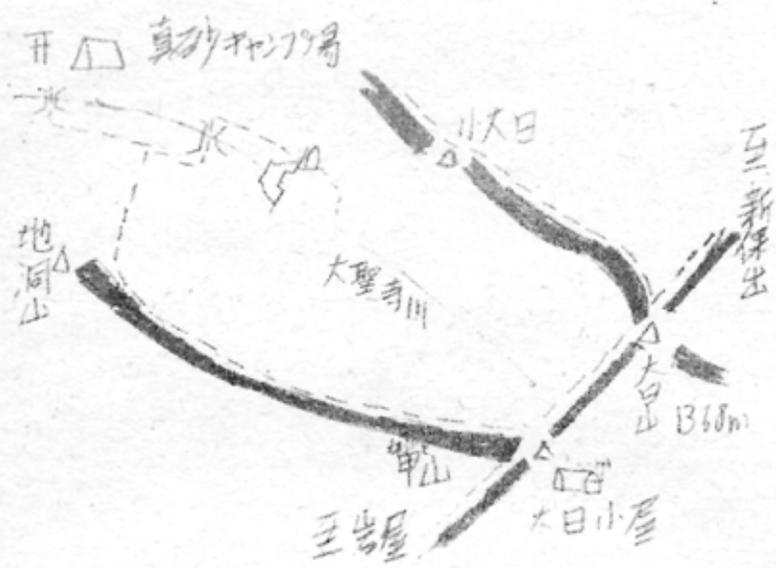
- 小松 加賀温泉 山中 九谷 一(1時間40分) 一(1時間35分) 一(1時間30分) 一(1時間25分) 一(1時間20分) 一(1時間15分) 一(1時間10分) 一(1時間5分) 一(1時間)

リ浄法寺山登山録

一年 土井

2年男 木村(山) 日田(山) 新井 永原 日元  
 2年女 小林 竹松 中村 一太郎 石田  
 土井 一太郎 森 三田 藤岡 久本 表  
 西先生

(大白山概図)



リュックは悪天に軽かった。心づきうさ足どり  
 軽く靴でも扱いたくばさうな気分であった。一  
 日目は... しかし、巖あしは苦ありというかこ  
 とく二日目はみろるべき苦踏が待ちかまえていた。  
 あの急な坂道を重いリュックとともに歩くのはな  
 により困難に思えた。肩にリュックがくさいこと  
 ために僕はニョートンを恨んだ。なぜなら彼があ  
 るは差別を容れせぬば、たすには地球も重力を弱  
 めてくゆるだろう。しかし僕はニョートンを恨む  
 と同時に自分の練習不足を気のせいわけにはいか  
 なかった。常日頃の努力をわけてすはばニョート  
 ンがどうあろうと平気ははずであらう。

自分の体力の衰えを感じながらも必死に右足と  
 左足を交互に動かしていると思惑に頂上につい  
 た。絶句、急に視界が開けきこに現れたのは  
 青い空、白い雲、そして森の山々、まさに自然下

あった。K君の顔はその美しさを強調しているか  
 のようであった。

さて問題は、小からである。頂上をさしぬけたの  
 はよいが、帰りの道は正体不明の夜や葉っぱで  
 ぬれぬけていた。非情にも、こまをさすらしい。  
 意地悪くかきんで、夜や葉をさしぬけて行くの  
 はなかなか安易なことではなかった。それでも最  
 初のうちはよい方だった。たんだんとからみ具合  
 が複雑になってくるにつれ、徐々に補助的にも  
 乱れが生じてきた。荷蹄は自然は履のリップを  
 進行方向とは逆にかっばるのだった。

その難所をすき小はあとはもつ葉に最後まで解  
 りることかできた。そして今無事にこうして、感念  
 をかいて、いらい山なのである。たしかに登山は辛い。  
 やめようかなとも思った。しかしその辛さ入後に  
 は、ほろしい何かを得た。いさめた。その山は向  
 たるか、はかすまでもないだろう。僕は今、山長

には、いつランキーだと思っ  
 ていよ。そこには山  
 夫から使は山にのぼるのだ。

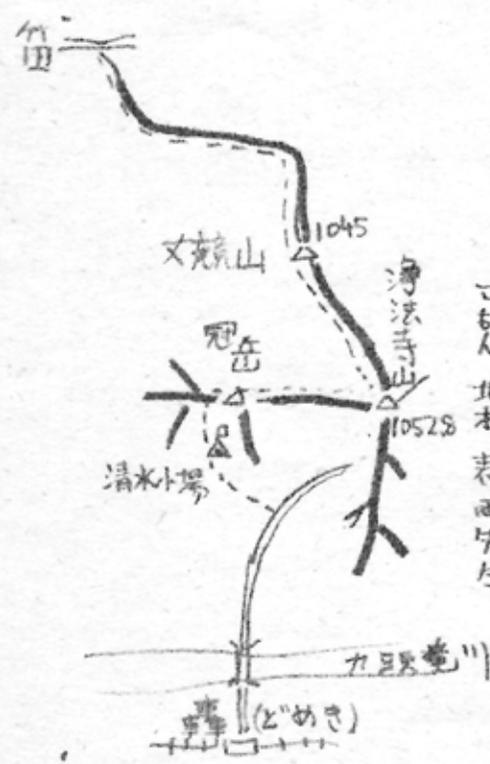
コースタイム  
 小松員福井

21日 車<sup>どめき</sup> 駅—(1時間)—登山口—(1時間)—清水小場<sup>しづみず</sup>

22日 清水小場—(1時間)—冠山—(1時間)—  
 浄法寺山—(1時間)—丈鏡山—(3時間)

登山口—(30分)—竹田—(2時間)—全津員小松  
 参加者 2年木村(山)、新木(山)、永原、東野、中村

1年 森、吉田、土井、河田、松村、多保田  
 こも人 北本、表、両先生



## 春の大会(女子)

24 甲村

白山は私たちにとって、最も身近な山です。私はもう10年近く、勉強部屋の窓から、それに道を歩いていても、本当にそれこそ毎日のように眺めてきた。しかし実際に登るのはこの大会が初めてです。大の山の頂上には、たんに今でも信じられない。それにしても自然の力はすばらしいと思う。神秘的で、驚異的だ。

6月3日、部屋出発が7時、別当出発を待たなければ30分。トッポは私が督促させて、でもうた。なにしろ初めての経験でペース、その他もよくわからなかった。それに女子だけの行動も初めてだから、多少の不安もあった。みんなの事、キー△全体の事を考えなければならなかったのに、頭の中には、他の隊との差があまり大きくなるまいやうに。なんとかがバテないやうにがんばらう。

ということだけが、たように思える。この日は天候がよすぎた。平素の行いがよすぎたのだろうか? 過去と振り返り、てみる。雨が降らないのが不思議なくらいです。途中10分休むと、2時5分に基ノ助小屋に着いた。ここで大休二、道具を取る。ここから上は雪、と雪のようだ。取し、事柄がまたこの日の日程の半分だということもされた。つくづく体力の衰えを感じた。それにはトレーニングもあまりいじりなかつた。これから以降は女子が最後となり、みんなを列を組んで登ることになった。男子の歩幅に合わせて歩かなくてはならないので、い、そうなのだ。二水高坂からは女子が二人歩出し、2人とも歩くのも遅いし、またまたというやうに涼しい顔をしていた。ますます取しくなる。こうしてなんとかならずに着いた。時間は4時5分。最後のなだ

5か所が思、ていたより長く感じた。すぐ夕食の準備にとりかかる。私たちの学校の食事が最も原始的と言えば言葉は悪いが昔ながらの、こいさを感じがした。早く食事の準備ができればそれにこしたことはないが私たちはまだ、すなわ、かじりの身でもあるし。前は変わるが、夕食はあまりおいしくなかった。わっ、ほりバテてたんだなと思う。食畢の後、外へ出て雲海を見た。眼前に横たわる真赤な雲の海。わ、ほり来てよか、たと思つた。単純でしようか。

6月4日、5時30分起床。夜は寒くよく眠れなかつた。たよりに思える。8時30分出発。この日も、とてもよい天気だった。まず御前峰に登る。頂上は9時頃。大池へ行く途中で滑落停止の練習。履食。大池に着いたのが10時34分。この後四坂まで行き空堂に帰、たのが3時5分となった。この

日はセブザ、り行動のため比較的楽であった。しかしジューンは薬品箱その他を一日持ち歩き御志勇さんでした。夜は星がとてもきれいなのに感激しました。

6月5日、この日は御来光を見に行、た。少し奥か、たが、片か今かと存、ている気持ちはななとも言えなかつた。長か、たようでもあり、短か、たようでもある。とにかくこの日のうらなに帰ることかでき無事この山行も終、た。開会式で「観光登山はしなれどほしい。」と言われたことが心に残、ています。

#### 参加者

2年 栗野 中村  
1年 本 吉田  
顧問 吉田先生

高校登山大会(白山・男子)

(野道)

高校登山大会 二年・永原

昨年の我が校の成績が散々ではなかったものだけに今年こそと意気込んでみたものの当日は雨もバツキンプカ。寸分下は雨もあつたりして部室を出たのは早に間にあつたりガリの時。これでは花か思ひやられる。別当子下のバスの中は曇天。登る前にもうばつてしつうぶつ感した。

開会式の後、一行は空堂へと登り始める。最初のワンポイントは、暑さのため日傘をさす手にもつパンケルが邪魔になる。甚、助ヒュッテからはかすの中、景色も何にも見えな。黒ほこ岩からは、空堂まで各取4人づつによる競走。着腹はびりから2位。

黒ほこ岩からは空堂まで各校4人づつによる競走。着腹はびりから2位。

翌日、一年の野一度もみることのできた御来迎を拜む。しかしその朝、飯の小さいこと。サブ行動で四塚山へ。途中、大友の下で雪上訓練。私は、体調が悪いといつて休む。皆のやつていふのをみてみると、やりたくなった。四塚山からの眺めはすばらしかった。しかしゆくりなめる暇なく10分でお終。

空堂に着いてから、天気回と常歳テスト。天気回をかく時になり男子、女子のラジオが共に聞こえかたしい。水山山やと思つた。4時少し前に直る。常歳テストでは、新正君が具指定の花をアヤメとすう大ボカをやらから。常歳テストは女子にまける。

最終日、朝飯のみそしるに、みそラーメンの又一ツを用いる。

水着を着て下っていく。一年生のバツキンプカの悪いこと、みんなだんごみだ。殺り池ヒュッ

テ跡を出発したすぐ後、河田君のダツ、  
 のヒモが何とワケる。他夜のパーティーと  
 はずいぶん遅小る。観光勸道の車道に下  
 る前の急な坂下は、疲小及らぬ物もの  
 多数下あつた。

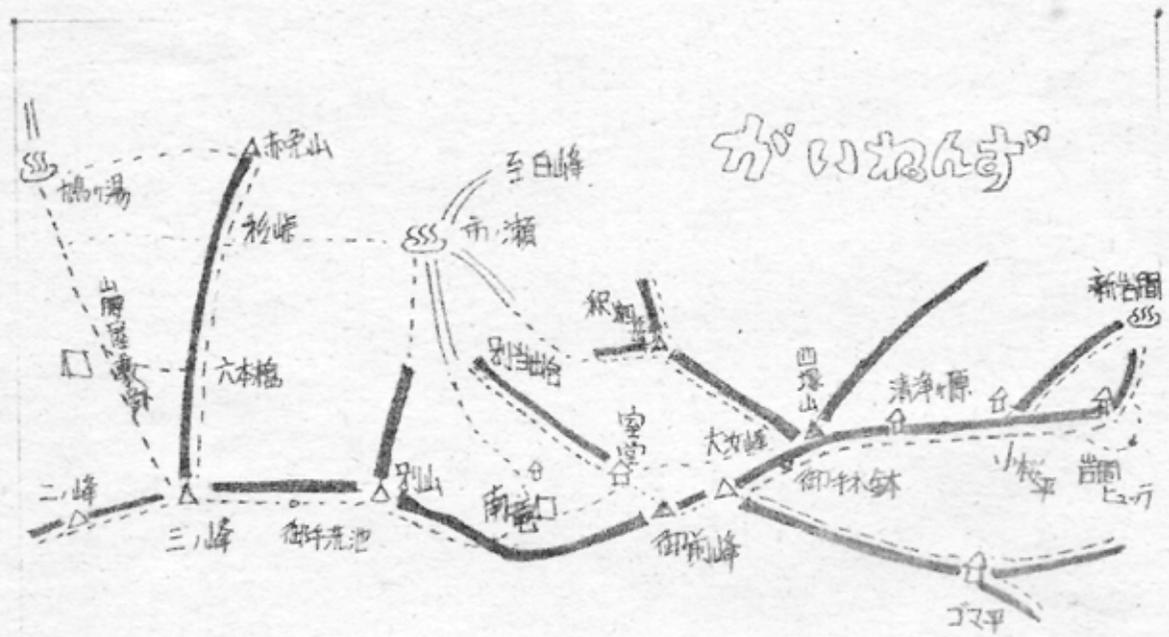
そいつ無事別当へ。結局右位におゆる。  
 やはり今回も他夜とのペースの違いが目  
 立つた。しかー、失年もマイペース下い  
 っつもらいたいものだ。

30 小松 金沢 別当出合 (2時間15分) 甚ノ助ヒ  
 コツター (2時間) 空堂

40 空堂 (30分) 御前ヶ崎 (30分) 大汐崎道下 (雪上  
 訓練)  
 (30分) 大汐崎 (30分) 四郎山 (1時間) 空堂

知 空堂 (2時間20分) 別当出合 金沢 小松  
 (参加)  
 2年未打(新井田) 永原・日元一年未打(田多) 甲村、以表

がいのんす



白山強化訓練

夏山合宿強化訓練(白山 77年・7・21) 23

此前三時あり、一行9人は、これから登る山ハ

の期何と不覚とを胸ト 眠れ目とこすりながら、

きたぐに

よせくと、と来リニせ。この山行での私の荷は

おんと18kg、20kgを割、七のは私だけ。他のXニ

ハートは、何となくおれおれを感じる。

鳩ヶ湯

そして鳩ヶ湯から登ること、三時間余、この日

は精進地と着く。ここはそんなとなくない、その

上草が多少生えていて、テントが張りにくい。

2日目は、三時手ト出た。多摩田か、軽い傾邪

のため、私も布のポールを掛つことにする。技探

ト出るまでは、草っぱと降りた夜露のため、腰

みら下駄下し、濡れに有る。

三ノ峰

幕営地を出発してから三時間弱、三ノ峰と着く。

三ノ峰からの眺めは素晴らしい。白山やその又つ

みんまも雪渓、道は、御岳乗鞍、多摩田とみよく見

える。

白山にはトシオカなくさんといふ。ここに

昼食、そして南麓の、13時30分頃、着く。今年も

南麓ではスイカがでた。

3日目は、三時40分出発。しかし、御前山と着

いたのは6時40分。日は高く上り、降りて、九アル

ブスとは、暗くなりとしか見えなかつた。御手

木鉢から、トツブを一つとめる。そこからはおそ

ト下り坂。おハースも凍り、たか、下り坂は

水も凍り、ハースが砕け、凍りかた。日元は、

ててしまつた。それで麓師山の身前で昼食。ト

ブも交代と有、てしまつた。

しかし、それから道の急なこと。いいかげん

とまごひがいやと有る。でも、楽々新道とでは、

どちらが妻か。肩裏を、七場所より三時間30

分、どうにか岩間ヒコッ、キト着くことができた。

岩間ヒコッ

しかし、ここ、一関地帯、七めてある。それ

は途中の道が、工事中のためトスから走らなかつた



七月二日、二時四十分起床。しむし生発は五時三十五分。とうしてこんな時間かひかつたのでしよう。まきむら二の半分の時間を生発できることにしよう。昨日下りてきた道を登る。途中峠、泉が見えた。まだまだ小さく、遠いものだ、たむ、ムはじ写真を取るのとは一時も二時も遅う。しまさ、こまでにあそこまで、たどり着けるのむと不念にぬる。

大群ふえ時三十分。北ノ俣は、九時十分。二の目もとてもよい天気だ。息だけひせいせい言う。おんだひまだ讀まじ。みんなもまきりよくおいようだ。そいで北ノ俣と少し行つた所で大休止をとることになった。十時十五分。缶をま使もうと、このころ口に火をつけたが灯油がらみさして止むらむ。火も大きくなり、雪をマツと消し止めた。現在地を知ろうとしたが、よくわからぬ。地図の見るまもんと勉強しむけぬ。

道をとり、ゆつくり登る。生発は十二時。二二で登んですいじの寒にぬつた。ようと思える。二の頂から霧が生きたし、霏しぬつた。寒にぬつた。はきつと二のせいもあるでしよう。しむし、霧が零ると道もよくわからぬし危なげなぬ。

三時十分。マツと黒部五郎の二手に別れ道のまゝ所に着いた。頂上へ行くや行むむ、少しもみちがび生え、して互たちたけで行くことになった。頂上まで十分。カールを下りきつた。か、四時三十五分。二二はテント場をなじようだが、二二にテントを張ることにした。夜、先住に遺棄の器を向むさいと抱きしむつた。

中村





度に疲れがどつとおしよせさ。あんなに遠くまで  
 夕方中に行けるのだううかと不安になる。ヤチと  
 十丈薬越に着ま。木、としたハもツかのま、こト  
 カツが又覚ケしい。必死に力をつけてイヤースこカン  
 はかうと心に言い聞かせて岩場を歩く。つらつら着い  
 たまゝと先ほどの声。十丈薬越を歩てカツ、わずか  
 一時間だった。槍の肩は思つたより広く、人の多  
 いのにびっくりする。大槍を見上げると、たくさ  
 んの人の球のように数珠つばまにたが、登つてく  
 くの女見える。ちまつと幻滅したが、氣をとりに直  
 してテイトをほり、登夜の夜、頂上へ向かう。頂  
 上に着いた頃は、夕暮れ時で人も少なくて、のんび  
 りできたが、あたり一面、ま、白に霧がかかっ  
 いたのが残念だった。しかし、翌朝、もう一度  
 登つた時は、快晴で、遠く富士山まで見えた。ま  
 のうまで歩いてきた道のりをたどりながら、越ん  
 できた山を眺めてみると、ほんじつ、あんなに

も憧れていた。槍の頂上に、今、立ちまわるとい  
 うことが夢のように思えた。時を忘れて、頂上に  
 いたずらでいた。  
 小林

・コースタイム

(24日) 双六小屋

↓ 十丈薬越

8時間

1時間

↓ 槍肩

(25日) 槍肩

↓ 槍平小屋

2時間半

2時間15分

↓ 白止山小屋

1時間半

↓ 新穂高温泉

・参加者

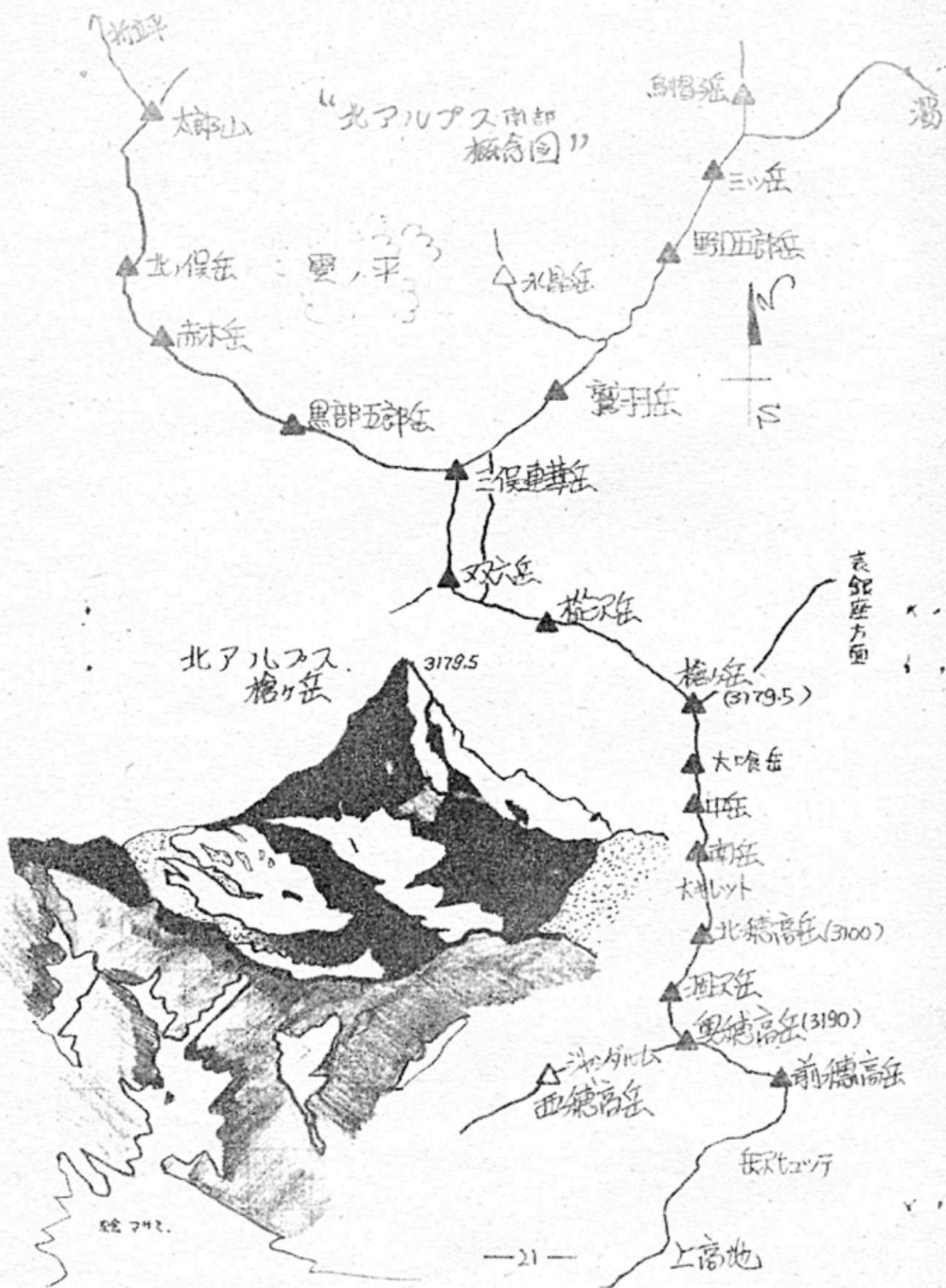
東野(山)

小林(山)

中村

吉田

顧問 北本先生



絵 242.

昭和五十二年夏の北アルプス縦走(男子)

昭和五十二年夏の北アルプス縦走(男子)

八月一日朝四時十二分、小松駅を出発。急行立

葛温泉

山で、七時七分糸魚川、九時二十五分信濃大町、  
バスで九時五十分葛温泉着。十時六分アスワアル  
トの上とすきだぬる。ダム建設のため、荷はトラ

ワに乗せマギリ口(ブナと尾根の登り口)・熊り  
口ともいう。)の近くまで運ぶ。体は足に乗せて

運ぶ。ついでにヘルメットも載せる。うわっんど  
アスワアルトとトンネルだらけの道と一時間三十  
五分ほど登る。(二山坂道がかわった。)着にお

いてはトラワリとの他の通行が多く、トンネルに  
おいてはドーブラー効果、間管の振動など多くの  
物理現象を体験、後に物理において全く往には立

たなかつた。(荷置場の穴際をおわび申し上げま  
す。一全く、クソおもしろくもない道であった。

荷の受け取り所、着く。ついでにメシへお昼時  
から、メシ以外おもしろくない。)も食い、記念

写真と撮り葛温泉止の登り口にテントと張りに行  
く。途中道をまちがえ、ダム工事のオッサンに指

示される。一時ちやうどに登り口に着く。晩メシ  
には腹がふ、たのまお寝する。天気は雲量八十%

ぐらい。三時にメシを作り始め、六時四十分に着  
寝。蚊が多かった。

明朝二時起床、四時十分出発、今日は下りはな  
いさうだ。ピンチがおそいため、バテることほな

かった。一人を除いては。登山、急坂とい、面を  
に足の小依いをさせよう。くれば二本目も使お

つ。(不可)八時頃になると人気が多くなる。  
(圧迫的に下りが多し。)、の尾根は八時頃か

下坂をするらしい。テント場までの距離と時間  
よ、マ表してあるのが特徴である。十時十五分

テント場に着く。茶屋そこに書いて鳥帽子岳に向  
かう。しかし、手前のピーリで満足して引き返す。

鳥帽子岳

テント場に降りテントを張り、雪床へ水き得に向



生。水晶小屋で偶然第三種毒を遭遇しをつかまえて  
逃した牛、中川さんは「カルメン初」を踊り狂う狂乱  
の夜はふけていったのであった。十八時三十分消  
燈。今日はカレシでいい天気だった。

以上 日元

4日 (三俣山荘↓槍ヶ岳)

午前三時四十分、まだ薄暗い。い  
くら早立ちが原則だとはいつてもい  
くらなんでも早すぎる。満天の星だ。  
少し行つて、梅干の入った夕ッパ  
を忘れたことに気がつく。いまさら  
取りにもとれないのであきらめる。  
三俣山荘から双六小屋へ行くには  
三つのコースがある。ぼくらはもち  
ろん一番下の道をとつた。理由は簡  
単、楽で早そうだったからである。  
双六小屋から槍への道には所々雪  
溪があつた。雪溪を見るとみんな元  
気がよくなる。何といつても暑い山  
歩き途中での一口の雪溪の雪は最  
高だ。「雪溪の雪を食べると腹が痛く  
なるから、雪溪の雪は食べるな」と  
いう話を聞いたことがあるが、なん  
でそんなことを言うのたろうか。ぼ

くはこれまでに何度も雪溪の雪を食  
べたけれど、腹が痛くなつたことな  
んかない。きれいな雪なら問題はな  
いように思える。一言、  
「雪溪はんざい！」  
槍の穂先への登りは楽しかつた。  
空身だから楽しかつたとも言える。  
でも明日は重荷でこんな所を通らな  
ければならないかと思つたと少々不安  
になつてきた。

3時40分出発(2時間10分) 双六小屋(1時間) 硫黄乗越(1時  
間) 千丈乗越(1時間) 肩の小屋(30分) 頂上(20分) 肩上  
(20分) 鞍生こまて

5日 (槍↓北穂)

夜中に雨が降つてきた。ホロテン  
トにポンキョをかけるがあまり効果  
はない。食当のぼくは、こんな日に  
出発したくないのでのんびりやつて  
いると、先生とOBが出発するから  
早くしろとのこと。先生曰く、  
「わしが北アルプスへ来る時はいつ  
もこんな天気だ。」 畜生。この先生  
「雨男」だつたのか、でもそのわり  
には、これまでよく晴れたな。

南岳への道は、本来なら朝日を眺めながら、三千mの稜線漫歩としやれこむはずだったのに、風は吹くはかすはわいてくるはでびどいものだった。南岳の小屋に着いた。風速は10m以上。かすは飛驒側から次から次へとわき上がってくる。こんな状態じゃ大キレットを通過できそうにもないと思つた。しかしOB曰く、「こんなんならどもねえいける。」「キレット」は切戸とも書く。尾根の切れ落ちた所のことだそうだ。この大キレットは一般向コースでは一番の難所だというのである。大キレットの下りは荷物に多少気を使つたが楽しいものだった。しかし、天守台ゴッこさやっとなかつたらかなりしんどかつただろうと思ふ。キレットの底では風が一般と強くなり、岩を乗り越すたびに吹き飛ばされそうになる。北穂の登りにかかる頃からかすも晴れ青空が広がりだした。滝谷が見える。クライマが見える。三三年後には必ずあの

壁に取り付いてやると 堅く心に決  
める。登りはきつい。飛驒泣き  
と言うそうた。登りがきついので  
膝が泣くからそう言うのか。飛驒側  
からの風の音がいつもしているから  
そう言うのか。途中、ヘルメツトを  
かぶったあんちゃんがトラニニートバ  
ーに「落ちた」とか「救助」  
とかわめいている。誰か遭難したら  
しい。引力がある以上仕方がない事  
だが悲しい事だ。北穂の小屋が突然  
眼前に現われた。この感激がたまら  
ないのだ。北穂の頂上にさっきの遭  
難者を救助するためへリコプター  
か飛んできた。「女の人はいい」も  
うだめだろう。そんな話が聞えてく  
る。なんとかならないものなのだろ  
うか。

今夜のお宿は、南稜テラスだ。

投生ヒュッテ出発4時35分(3時間)南岳(3時間)北穂高山

6日 (北穂↓岳沢)

夜半、前線が通過したとぎに突  
風がきて黄テンが半分まくれ上がっ

た。その時、他の者は飛び起きてテントを補強しているのに、一人だけ風雨の中で悠然と寝ている。やっかいた。あえて彼の名は書かない。しかし、未来の大物たる条件は十分たろう。

朝になるとうってかわっていい天気だ。眼下の涸沢は雲海の下である。常念が雲の上。そのピラミッドのような姿を浮べている。そこから、今日の太陽がのぼってきた。あたり一面真赤だ。これがモルゲンロートなのだろうか。すばらしい。他に形容詞が見っからない。隣りのテントではカラビナやハシケンをかキヤカキヤいわせている。これから滝谷へ行くのたろう。ほくもついでにいきたいな。

唐沢岳への道は、昨日の大キレッ人さすのまま小さくしたようだった。穂高岳山荘は、すてきな山小屋だ。他とほとんど違ふ。ごたごたして、いなくて、スマートな感じなのだ。

奥穂高岳、標高三一九〇m、日本

第三位。前の槍ヶ岳では、ガスで何も見えなかつたけれども、ここからはよく見える。ジャングルム、前穂富士、南アルプス、焼岳、我が白山、上高地……よく見える。

吊尾根を前穂にむかう。一年生達にはほんとうに、ここまでよく歩いてきたと思う。でもテント生活は少々急慢な点が目立った。先輩から、わしらの時は雪溪で滑落したり、落石にあつたり、下りでころんだりしたと、色々聞かされていたので、どうなるのかと心配したが、どうにかここまでこれた。あとは前穂の下りさえしつかりしてくればいいのだが。岳沢は時30分、今から松本へ出て列車に乗れば、明日の朝には家へ帰れる。しかし最後の晩くらい山の途中でゆっくりしたいので、ここで泊ることにする。

北穂5時30分発(2時間10分)穂高岳山荘(40分)奥穂高岳(1時間30分)前穂高岳(2時間)岳沢

7日 (岳沢↓自宅)

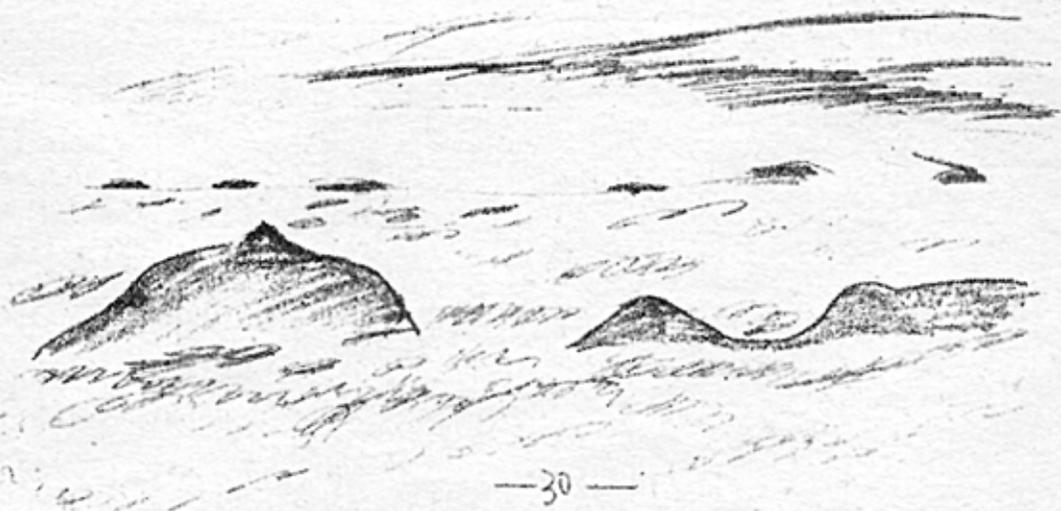
あとは、だんだら道を下るだけ。  
上高地、いい所だ。少し散策してみ  
たいと思つていたが、あまりに人間  
が多い。多すぎる。早々に立ち去る  
ことにする。人のいない時期にまた  
来てみたい。今度はゆくりと。  
今年は、去年みたいに雨だらけで  
なくて本当によかった。この合宿は  
90%成功だったと思う。マイナスノ  
%は、ブナ立尾根でぼくがダウンし  
たことによるものだ。あとは色々細  
いこと。

以上木村

参考

24 木村(山) 新本(山) 日元 14 北村 河田 土井

OB 中川 草深 顧問 北本先生



インターハイ 8月3日↓4日 2年東野

八月三日、先輩達に見送られて小松を後

に、

八月四日、地元の中学校で開会式。や

はり、広島だ、とても暑い。立っている

だけでも汗が出る。長い開会式が、う

らめしく思える。倒れる人も数人いる。

暑いということは、覚悟していたものの

つらい登山になりそうだと、先が思いや

られる。

開会式が終わると、今日の基营地へ向か

う。テントを張り、食事をつくって……

あすから、いよいよ本格的な山登りで

ある。

八月五日、山へはいって、二日目である

最初の急な登りは、かなりきついとま

っていたが、みんな、とても元気に登って

いく。暑いは風はある。隊が大まないので

進む速さは遅い。いつのまにか、深入山

の頂上に着いた。ここで、大休止がと

れ、草花の説明がある。

深入山

深入山を出て、餅の木へ向かう。よう

やく着いて、ここでテントを張り、い

たん、荷物をおき、身軽な格好として

奥三段峽へ向かう。奥三段峽に着き、わ

らじをはいて、沢登りをする。川はまれ

いでつめた。ひんやりとした空気は、

すこく気持ちよかった。登っていくと

小丁が滝などもあり、景色はすばらしい。  
ものであつた。あまりにすばらしいので  
はしゃいでしまつて、沢登りが終わつた  
ときは残念な気分をした。こうして、沢登  
りもぶじ終わつて、テントを張つてある  
餅の木へ戻り、軍記テストや食事、あす  
の用意などとして、この日は終わる。  
八月六日、餅の木を出発して、有名な三  
段滝を見ろ。すばらしい。スワツチして  
いる人いろいろ。ここから、猿蓑へ向かう  
が、なにしろ隊が大まないので、ちよつと  
歩くと止まり、ちよつと歩くと止まりし  
て、ペースは乱れ、その上ナウに、すこ  
い暑ナぞ少しバテてきた。

予定より、だいぶ遅れて、砥石郷山に  
着いた。ここで昼食をとる。みんなかな  
り疲れてきた。しばらく休んで、ここを  
出発する。ところが少しいくと、経験不  
足、練習不足、予備知識不足などから、  
石油がもれてやけどをしたり、バテたり  
して、隊の一番最後に行くことになつた。  
それでも、かんはつて歩き、隊より少し遅  
れただけで、恐羅漢山 凶難漢山に着くことができ  
た。予定が変更されて、ここからすぐに  
今日の幕営地である、牛小屋高原へ向か  
う。幕営地に着き、先生と相談し、みんな  
の体調を考慮して、あすは、棄権する  
ことにする。

八月七日。山をおりて、旅館へむかう。

コース説明

八月五日

深入山幕営地 → 深入山

餅の木 → 田代 → 奥三段狭

中の甲 → 十文字峠 → 樽

床 → 餅の木幕営地

八月六日

餅の木幕営地 → 葎が原 → 田代

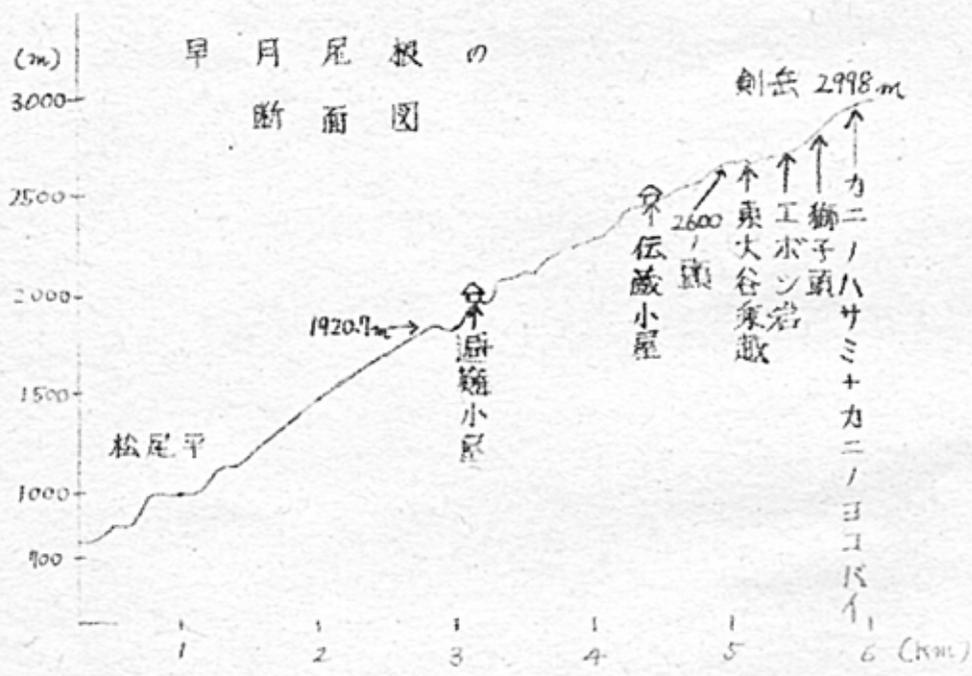
砥石御山 → ナツヤキノキビシ

巧羅溪山 → 牛小屋幕営地

参加者

東野 (LL) 中村 (SL) 吉田 森

顧問 表先生





石川県高校新人登山大会 早月尾根

二年 小林

九月三十日朝七時、馬場島を出発して早月尾根

下向かう。雨もあが、て、行の好むの登山日和だ

。松尾奥の平まで行来を登りだ、たが、道は、だん

だん急に行、てくる。さすが日本三大急坂のい

どフンといふだけのことはある。しかし先頭を行く

ウカちゃんノビッナは落ちない。確実な足で降りて

じんごん進む。入部したばかりのユツコも、それ

トビッタリついでゆく。ユウちゃんも遅れたい。

月がたが頼もしいがざりた。ところが、今の私が

だんだん遅れがちに月、てきた。折々の足痛が頭

をもたげてきた。先生は私のために、再三ピ

ッナを落とすように言、て下さるが、自分がじん

月の足をひ、び、てい、ると思、こ、情けなく、来

なければよかったと思、た。しかし、一歩でも

多く前へ進む。その心に言いきりて来た。

小屋はまだ遠い。せんぼらう。その思、ていた矢

先、目の前に伝蔵小屋が見えた。一わたり着いた

にみんなが急に元気だ。た、青い空が目にしめ

る。紅葉が美しい。ああ、来てよかった。心から

その思、た。

やも遅れて、鼻工のせうが着いた。一年生だけ

で、それ二人きりでよくがんば、たがあと思、う

。彼方たちとはこれからも大好を深めていきたい

と思、う。

また、大会ではミ、テ、ニ、グを行、下、た。有

員が顔をおわけて各枝の招待や出し物など楽し

く過ごした。これが大会の本当の良さだ。もう二

度で会うことおぼい人たちの見方が、その思、た

。 (ハコースタイル)

馬場島

20分

↑ 松尾奥の平

↑ 時間 30分

↑ 早月尾根小屋

↑ 時間 40分

伝蔵小屋

無効者 2年小林、1年吉田、森  
顧問 北井先生 舟津

雨飾山 (個人) 9:30 ↓ 10:1

スギ 新本

「ア、一七九列車は妙川に達して糸魚川街道を南下して行く。僕の短かい人生経験のうちでもう十回近くこの道を通つたことになる。ある時は山への期待、不安を比に抱き南下し、あつ時生満足感と倦怠感に耽上した蓋、……、いろいろな人と併に通つてきた道、そして今日のパートナーは山根である。彼が中平からの後輩で今度小笠原に入替するところになった新鋭である。とにかく大車は南下する。」

根知駅

根知駅を下車。一時間半ほどの荷物を合はし荷物とバスを小口へ。午後一時ごろ歩きだす。空はど人オリ曇り、今にも雨が降つてきそうだが、雨道と十分持を歩いたところまで砂防工事の車に拾われる。登山口まで力せてもらう。

市の中で「お、お、お」といふ音がする。あ

まり蒸の話題にならず地元の入しを登らないと、つたの目を最近の温泉にするのがなりふくたに……。今日は9月30日金曜日。登山者は彼らも巨峰のようだ。静かな山。僕の求めたい山はそれだ。

登山口を礼を言つて「おつさん」と別れる。根小新湯まで徒歩約二時間ということ。二人は汗ばんであせうたに……。くりと歩きだす。ほとんと平坦を整備された道と行く。いまにも雨が降りそうだが、天気の中三時前に根小新湯に到着。

正激な小屋が立っている。小屋番の女の人が一人、いやもう一人小屋の人がいるみたい。今日の泊り客は一入だけだという。「それさよく整備が成りたっていますね」と思うと湯沢を録音しているからと笑う。小屋の前にテントを張り、夕食後風呂に入つて七時すぎ横になる。

十日二日、四時半起床、六時半すぎ出発。小屋

の人が見送ってく来る。「お世話になりました。」  
「気を付けて」

昨日と違ってかあ。いい天気。左午に海谷  
の山々を眺めながらゆっくり登る。山根もあまり  
つらくないみたいだ。教習もいると新人の頃の  
自分を思い出す。なんかが要領だけよくなつたみた  
いだ。・・・なんぞ苦笑いしたり。

兼師尾根は普通三時間ぐらいの行程。適当に休  
憩したりしながら・・・そろそろ十時頃。笹平  
にとびだす。ここは雨霧山の肩にあたるどころ。  
頂上は午の届きそうが所に見える。「ムッ」にも  
載っていただけと、「雨霧山を味笹平にとびだした  
時の感動が最も印象的だ」なんて。

十五分ほどの登りで頂上に立った。一九六三米。  
谷川岳と同じ高さだ。この日は深田久弥さんが登  
られた頃のように能登半島までは見えなかったが  
燦火の跡が生々しい焼山が印象的だった。また頂

上にある石仏にはスモいわれぬ風情が漂っていて、  
その歴史が感ぜられた。

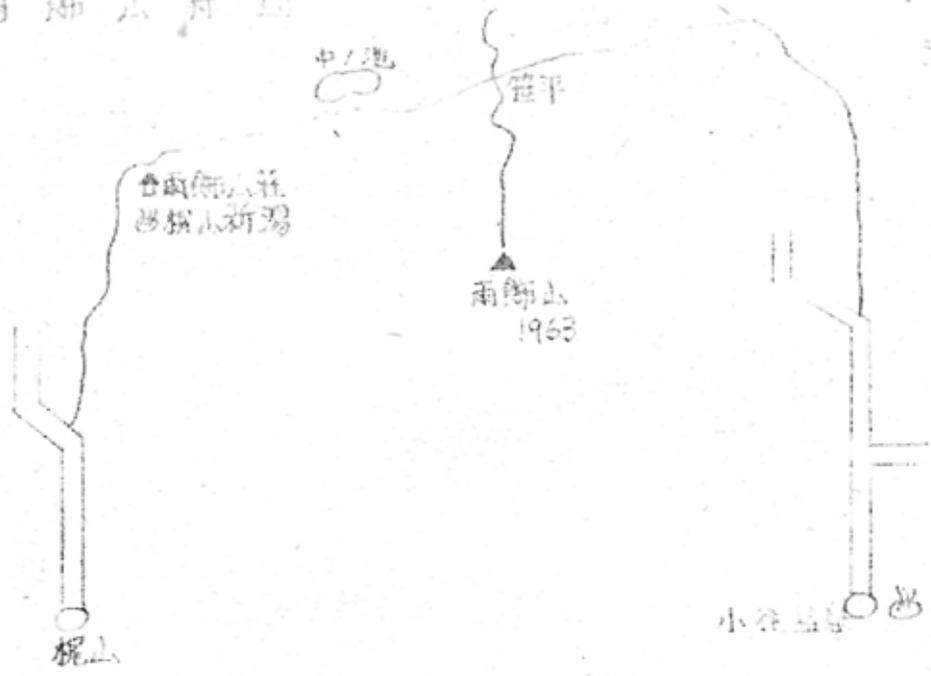
頂上を飯をすまし、十一時半下り始めた。笹平  
から登ってきた道とは反対側、荒瀬沢へ急降下。  
賑いながらも一時雨宿を沢におりた。しかし小谷  
温泉はまだ遠い。すこし登り尾根の腹をまさ気味  
に道は続く。山根がバテ始める。しきりに休みた  
がる。なんとなたましつづき進み二時すぎに林道に  
とびだす。おちていた漫画の本を一時別モノにし  
てしまひ、あわてて歩きます。現金も持た、こ  
んとは山根の方が威勢がいい。

三時四十五分小谷温泉に到着。バスに遅れたの  
を保養センターの「あんちゃん」に中土駅まで送  
ってもらう。時間がないので制限速度三十kmの処  
を六十km近くでぶつとばす。五時少し前駅に到着。  
礼をいって名前を聞いて別れる。

十七時二分、「静かな山を味あえた喜び」と、

「土地の人が橋に飽かされた喜び」とを胸に、僕  
は再びアイーゼル列車に吸い込まれた。

雨飾山付近



大日谷廻行

10月29・30日

2年 新本

十月二十九日、一年と永原は死生の車  
で完成し夕食の準備をする。残りの二年  
すむわち我々は午後五時、九石でバスを  
降り歩き出す。美大の中谷さんの後輩で  
ある上野さんが同行し四人でとけとけと  
歩き出す。十分ほど歩いたところで水本  
先生の車に拾われる。五時半ころ真砂着  
夕食の準備が遅れている。また食器を忘  
れてきたという。自覚不足であるとい  
うか。真砂味は足りぬといふか。とにかく  
反省の必要大なり。八時頃おやすみ。

十月三十日・六時十分テント場出発

八時二十分一巻目を入れる。そこか

道のまわりは有丈ほどのススキ、そそそ

らは単調な風景のくり返し。九時半頃

う日の出の野間なので空が紅に染まって

Fは、女子は右岸を巻いて。男は左岸

いる。それが紅葉の赤黄に調和して美し

さを直登、登り切。たここで休憩を八

い。大時半頃砂防ダム着。わらわとつ

る。前方には甘め池が美しい。歩き出

る。赤原。日元・木村。北本先生は登山

てすく15米の大池があ。たが後は渠であ

靴。美大の人が先行するといふ形で湖行

る。十時半。昼食。標高は九百米くらい

開始。とたんに赤原が水中へ。いきりF

日元が少し遅れて到着。ち、とまい。

ボヤいている。しばらく進むと大きなへ

ているようだ。出発。しばらくいくと20

さほど大きくないが、釜に出る。ザイル

木の二段滝。傾斜はわりとゆるくホール

で確保しこ右岸をへつる。二十分近くか

ドも多い。直登する。あとは小滝の連続

か。て。みんな通過。と思いきや木村が

10米の中滝。二のあたりから水量が減る。

重なる。水中へ。明日は我が身と思

まわりは景色いもみじが美しい。山大目

い切り笑う。

山がみえる。

さ木とち木のニ段滝に落ちる。大きな滝

がいて僕達のものものしい姿を不思議に

も最後だろうからやりたいたいの片り直登

うに見ている。一時キ、山頂に到着、三

する。ニ、三人登、右とこで河田がホ

十分ほどして下りはじめる。

イルドをぶちこわす。次の僕はほんとか

三時二十分、テント場帰着、テントを

登、たがへん、へん、最後の工井が登

たんで九谷まで歩く、九谷着五時十四

れない、滝の途中で五分ほどがんば、た

分。

がたので左下進げる、その間にみんなニ

参考者

人をおいていってしま、た、二人ともヤ

2年：木村(○)新本(△)・日元・永原

りにな、て水中を歩いていく、

1年：河田・多保田・工井・山根

十一時半、水は二本に別れる右へいく

舟津 吉田

と甲山の方みたいだ、直進する、これよ

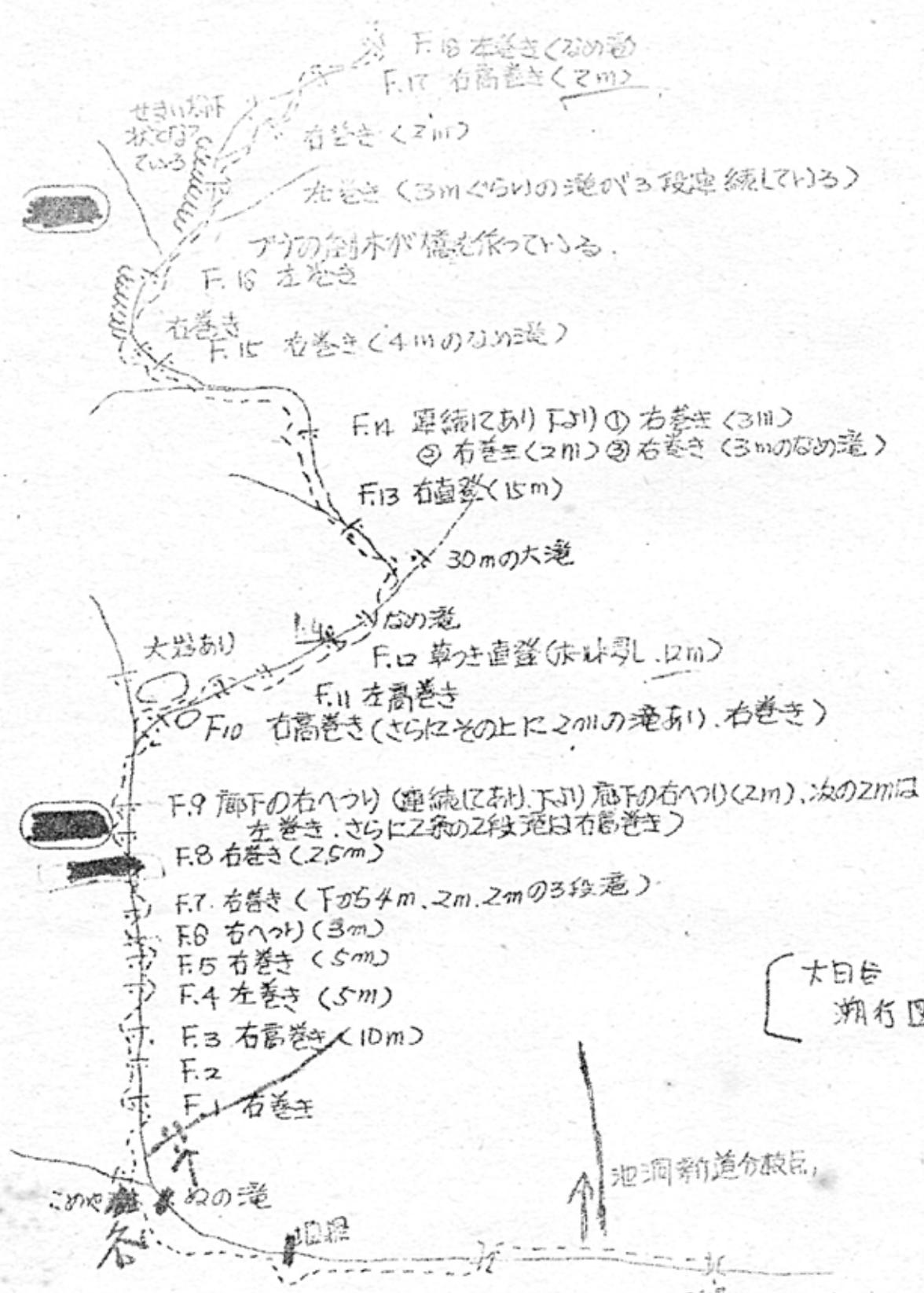
顧問：丸本 表茂生

り上は水もほとんど涸れる、傾斜も急に

はりそろそろめらじもこめ出だしたころ

登山道とみだす、親子連れのハイカー、





せまい峠  
状の  
ていさ

F.18 本道きく(石め道)  
F.17 右高ききく(2m)  
右ききく(2m)  
左きき(3mぐらいの滝が3段連続している)  
ブナの倒木が橋を架けている。  
F.16 左きき  
右きき  
F.15 右きき(4mの石め道)

F.14 連続にあり F.11 ① 右きき(3m)  
② 右きき(2m) ③ 右きき(3mの石め道)  
F.13 右直登(15m)  
30mの大滝

大岩あり  
F.12 草つき直登(赤い乳、12m)  
F.11 左高きき  
F.10 右高きき(さらにその上に2mの滝あり、右きき)

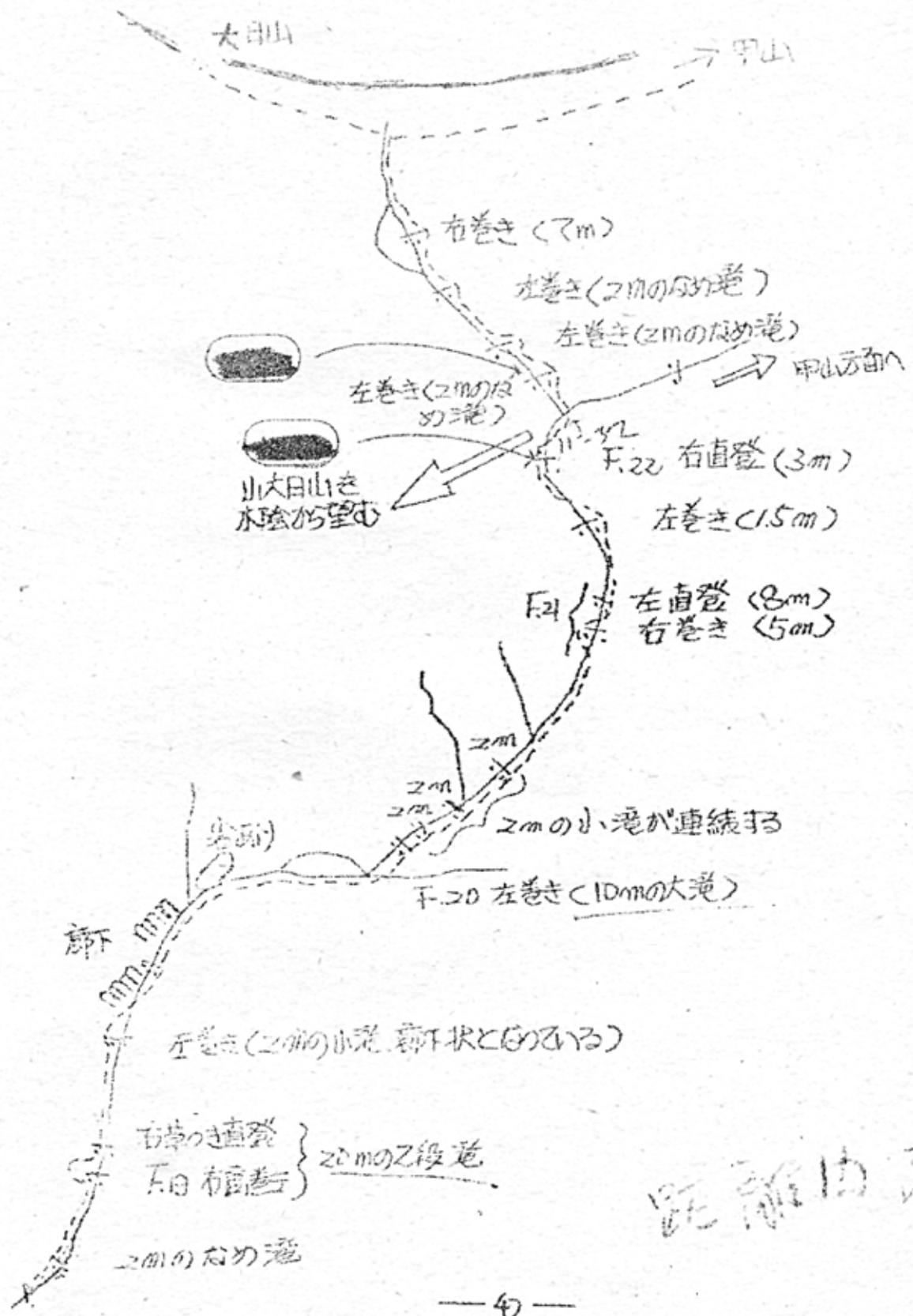
F.9 廊下の右へつり(連続にあり、下り)廊下の右へつり(2m)、次の2mは  
左きき、さらに2条の2段滝は右高きき  
F.8 右きき(2.5m)  
F.7 右きき(下り4m、2m、2mの3段滝)  
F.6 右へつり(3m)  
F.5 右きき(5m)  
F.4 左きき(5m)  
F.3 右高きき(10m)  
F.2  
F.1 右きき

大日台  
湖行図

この地  
各  
ぬの滝

池洞新道分岐点、  
↑

真砂



距離由下

奈良岳 11月12日

木村

(個人)

2年

雪だの

白山以北の100m以上の峰々は白くなって  
いる。今あるあの中の一つ奈良岳に登る

のかと思うと、こわいようは、うれしい  
ようは、怖んともいえぬ気持ちにおそわ  
れてくる。それにしても自転車に向い風、  
はきつい。まだまだ先は長いというのに、  
体がバラバラにほりそうほくるいつつい。

河原に張ったテントを出発し、長い林

道歩きのと、登山口にたどりついた。

そこには、朽ちかけて見すごしそうな指  
導標と、もう少し水が多ければ滝にも見  
えるような登山道があった。しかたなく

そこを登る。急だ。怖んて急な道怖んだ。  
一時間くると登ると急登も一段落し、休  
んでいると、鈴を鳴らしおが5人パー  
ティトが登ってきた。

道が緩くおつてくると、ヤブと落ち葉  
と雪のせいで道がほ、きりしほくなって  
きた。木の枝の赤テープのあかげで、怖  
んとか進めた。

主線線に出ると左手に、犀川の源流が  
巨大な火口のように見える。そのむこうに  
目ざす奈良岳がある。右前方には大笠山  
が、長々と横たわっている。後線の道は  
小枝が道をあおうようにおつていて、  
Bの村中さんが言う「わあ、おとほつて

いる。という状態だ。大きく弧を描いて、  
いる。核線を通して、奈良岳の登りにかか  
ると、ささが道をあわつていて、その上  
にさらに雪が10cmほど積っていて歩きづ  
らい。つらい。頂上にたどりついたとき  
は、もうグラウンディング。頂上を目前にして、  
さっきの4人パーティーは、白山に雲が  
かかっていた。天気が悪くなるようだ。  
私たちは装備が十分でないので、ここか  
るひきかえします。と言つて帰つていっ  
た。ほくには、日中一ぱいは確実に天気  
はもつぎうに思えた。どちろが賢明かの  
はうだろうか……。

頂上かるとき、上部が雲にかくれた白山

かす。御嶽、乗鞍をほじめ、西穂、奥穂  
かす。白馬手での北アルプスもよく見えて  
いる。景観の160川峰かす、これだけよく  
見えるとは思いもよらなかつた。

一度はふる水た山をものにできたうれ  
しさを胸にいだいての下山途中前を歩く  
永原が突然足をとめた。前を見ると、10  
川くさるいおこうにかもしかがける。じつ  
とこちろを見ている。こちろが歩いてい  
つても、じつとこちろを見ていた。ここ  
は人里離れた山の中であることを再認識。  
自転車での帰宅途中、雨が降ってきた。

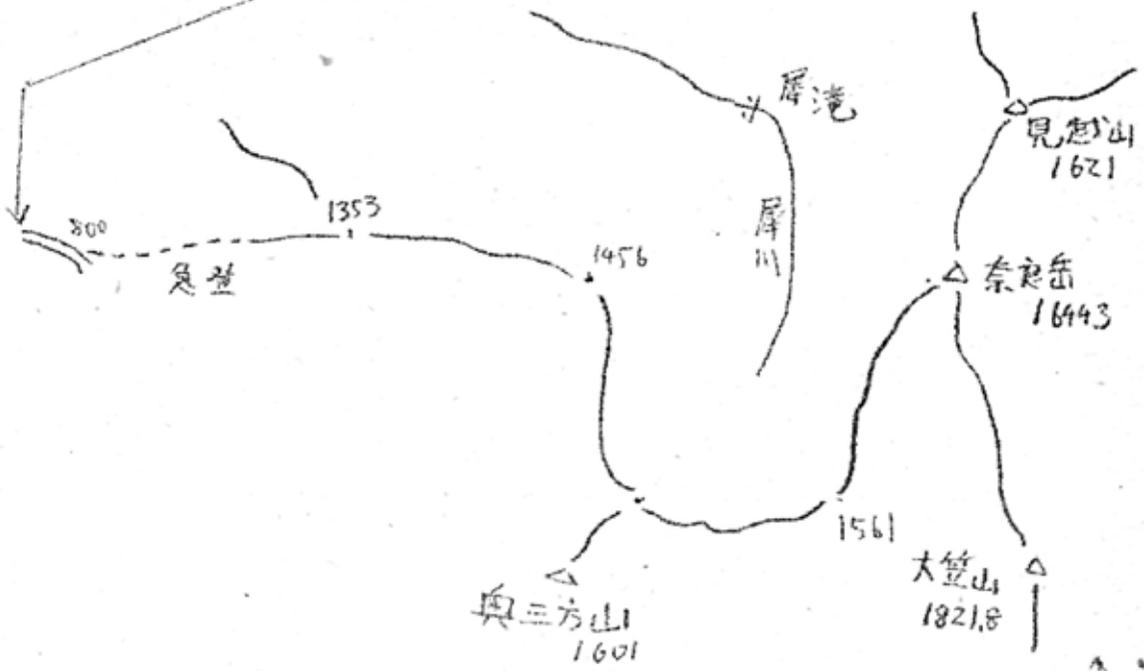
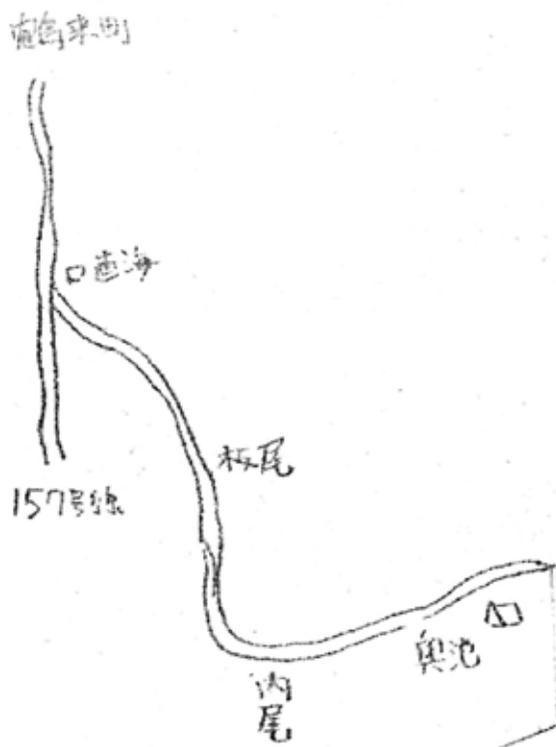
ハタイム

12日、登室一三三〇……自転車……

奥池(一六三〇)……徒歩……河原のテ(一)外  
場(一七〇五)

目 出丸(一六二五)……林道……登山口(七五五)……綾線(一九三〇)……頂上(一一一四五)……出丸(一一二一〇)……テント(一五二五)……出丸(一六一五)……自宅(一八三〇)

参加木村、永原



II 小松高校山岳部略年表 II

II 小松高校山岳部年表 II

昭和22年(1947年)

22年 旧小松甲学校在物部及び一般生徒若

干で、込山・白山・採集を行う。

昭和23年(1948年)

23年 新制高校発足と同時に山岳部誕生

大笠・冠越山アタツクにて遭難未遂

昭和24年(1949年)

24年 部報創刊

昭和27年(1952年)

27年 高校統合制解体により 本校は小

松実高(現工業)と分離する。同時

に実高にも山岳部設置。本校山岳部

と、工業山岳部は、兄弟ということ

また剣沢合宿(前記)において遭難

未遂

昭和29年(1954年)

29年 大笠山偵察行にて遭難未遂

昭和33年(1958年)

33年 大笠山アタツクにおいて遭難。救

助に全部員出動↓救助

白山においてインターハイ行なは

る。そのための、小池↓三ノ峰↓白

山コースを、我部が開拓

昭和34年(1959年)

34年 本校創立60周年記念に、O.B.白山

室堂に「黒百合の鐘」を上げる。

昭和36年(1961年)

36年 白山合宿中に、北米濃地震に遭難

無事下山。ルート短じ壊滅

山麓一号でる。

昭和40年(1965年)

40年 高体中 春山合宿(尾で尾根)

昭和42年(1967年)

42年 1月 中川頼子さん大日にて遭難

3月茶見

昭和46年(1971年)

46年 4月 白山遭難未遂

(資料提供 三井先生)

山岳部に入って

一年 森

瓶もなく、ただ太陽だけが無惨に照

っている中を、身を凍らせてしまいそうに寒

さの中を、自分の足で一歩一歩進んでゆ

く。この一年をふり返って一番印象深か

ったのは、ヤロリ山に登ったことです。

こうして書いていけるといふことか思

い出されてきます。初めて飲んだ川の氷

の冷たくておいしかったこと、もう坐り

込んでしまいたいと思うほど苦しかった

こと、空堂でみた夕焼けの美しさ、もし

て困っている時みんなか助けしてくれたこ

と……みんなとてもいい思い出です。

もし山岳部に入っていないか。たら、この

一年、ずっと味気ない寂しいものになっ

ていたと思うのです。

山の素晴らしさは、登ってみて初めて

わかるものだと思います。私にはまだ本

当の山の素晴らしさがわかっていないか

もしれないけれど、今まで感動することか

少なかつた私にとって山は感動そのもの

です。登る過程が苦しければ苦しいほど

後の満足感は一とおだと思うのです。

また人の優しさも強く心に残っています。

みんなに迷惑ばかりかけて、自分は何

もできなかったことがたまたま一つに残り

ます。

とにかく私は 山岳部に入つたことを  
とても幸運に思っています。

（おわり）

山溪のメモ



編集筆記

編集畏し

印刷工と製本工と使いたりと 1977 C.L. しるま

とにかく念願の部報が出せそうだ

部報をんかつくって何になるんだ」と

今はもう三月の下旬、来年の今ごろは、

いう人がいる。実際の利益は、作文力の

二つ二つと笑って山行の計画を立ててい

養成になり、入試の小論文の対策になる

るか、腹を切る覚悟を決めているのか、

ことと、老後の記念品とすることくらい

どちらかだろうに、ぼくはこんなことに

だろう。しかし、何年も何年も、何冊も

時間を食われていていいのせうかとい

何冊もつくっていいけばきつと何か大きな

う気持ちになる。こんなもの早くきり上げ

ものが得られるにちがいない。どうか、

てじまうって、受験勉強にかからなねばど！。来年も、さ来年も部報を出してほしい。

（この文集の採録を書いってくれた諸君に、クワシんで感謝の意を表します。）

小松高山岳部52年度山行

はば計画通り↓○

〔男子の部〕

→ではなかった↓X

〔女子の部〕

4月23・24日 大白山新人歓迎 4名 ○

5月21・22日 淨法寺山 新人訓練 7名 △

6月3・5日 白山インターハイ予選 3名 ○

11・12日 倉ヶ岳 ロッククライミング 3名 ○

7月21・23日 強化訓練 2名 ○

8月2・7日 北アルプス縦走 6名 ○

(鳥飼寺↓前穂)

9月30日 新人大会 5名 △

10月1日 剣岳(早月尾根)

10月29・30日 大白山沢づめ 8名 ○

12月25・30日 八方尾根スキー合宿 3名 X

3月27・30日 大白山春山合宿 7名 ?

4月23・24日 大白山新人歓迎 4名 ○

5月21・22日 淨法寺山 新人訓練 4名 △

6月3・5日 白山インターハイ予選 4名 ○

7月20・24日 北アルプス縦走 4名 ○

8月3・4日 全国インターハイ(広島) 4名 △

9月30日 新人大会 4名 ○

10月1日 剣岳(早月尾根)

10月29・30日 大白山沢づめ 2名 ○

(男子と)

Komatsu Koto Alpine Club

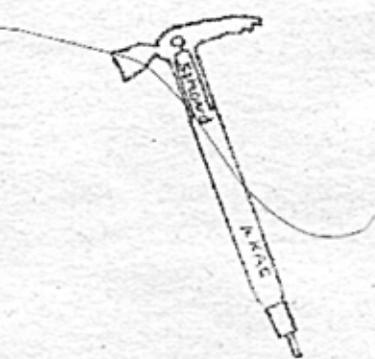


（52年度購入備品）

一、ダンロップアテント	6人用	四万六千八百円	評振契会より	6月18日
一、グラランドシート	6人用	三千円	生徒会予算より	6月25日
一、ウオウターキャリー	100	千七百七十円	同	同
一、角型コックヘルセット	中型	三千九百六十円	同	同
一、グラランドシート	8人用		部内費より	7月17日
一、シヨラフミズノ夏用	×3	八千七百円	同	同
一、ピッケル&シモンMk2	×2	二万八千九百円	生徒会予算より	11月26日
一、ワカンジキ	×4	一万六千四百円	部内費より	3月10日

他に、卒業記念として、三年生から

「アタックラント」一式が贈られる予定



＝松高から見える山々＝

＝松高から見える山々＝

1) わざわざ見る山

特に山の位置を、形等が正確

であるかあたり、知らせて下さい

倉ヶ岳

ヶ岳 565m

獅子吼山 630m

三ツ輪山 1069m

本三郎

見越山 1621m

赤松岳 1644m

奥三郎山 1601m

大釜山 1821m

宝剣岳

大1145  
雙ヶ岳 1851m

口三郎岳 1269m

高橋子山 1136m

火燈山 981m

十郎山 377m

観音山 402m

雙ヶ岳

大野山 1597m

冬ヶ山 1628m

山毛掛尾山 1365m

三方山 18

見返坂

四郎山

大野峰 2689m

権前ヶ岳 2702m

秋池岳 2055m

別山 2399

八郎山

三ヶ岳 218m

1165

松尾山

白ヶ山

鶴馬主岳 1096m

大倉山 651m

大峰

高倉山

荒倉山

取立山 1301m

1190

甲木立

大白山 1368

小白山

浄法寺山

大燈山

富士 992m

鷹落山 999m

細山 604m

三ヶ山 493m

柳掛山 498m

小倉山

川崎山

昭和53年4月1日発行

・編集責任者 木村

・発行所 小松志枝山会館

・所在地 石川県小松市丸の内町  
小松志枝内

・印刷 同上